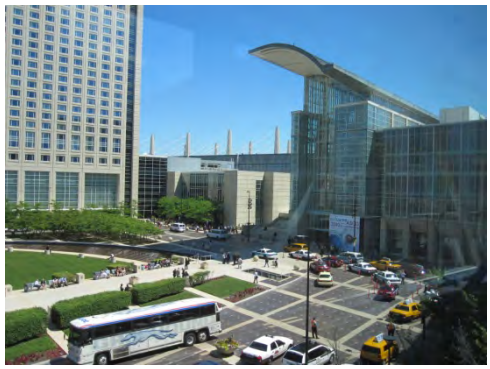
『日本医療薬学会 海外研修』報告書

公立学校共済組合 九州中央病院

松尾 宏一

今回、『平成22年度JSPHCS/BMKK 海外研修』に参加させていただき、6/4から6/8まで米国イリノイ州シカゴにて「American Society of Clinical Oncology（ASCO）46th Annual Meeting」に参加し、またその後の6/9から6/10まではイリノイ州アナーバーの「University of Michigan Hospital」での薬剤師研修を経験した。

本年のASCO 年次総会は『Advancing Quality through Innovation』をテーマにて開催されていた。この会議ではがん全領域の革新的な発表が毎年のように行われ、その後のエビデンスとなって来た。そのため世界中から多くの参加者が詰掛け、会場は連日大盛況であった。



そのような中で私が驚いたのは、学会で発表される各領域の内容の充実さや発表数は勿論だが、その大会の運営の規模や方法が斬新である事であった。会場でのインフォメーションを行うためにそこら中に配置されている係員数、会場やシャトルバス内で放映されている「ASCO TV」、その日の発表がインターネット上に即座に更新される「Virtual Meeting」、参加者の磁気カードによる出席管理、会場に配置されるモニターの大きさやその数、自動車ショーかと見間違えるような各メーカー・ブースの豪華さとその参加数、参加者の質疑をwebやe—mailまたはTwitterにより行う事、抄録がUSB化されており、学会名物の重い荷物を抱えての行動が改善されている事、さらに会場内に「Wi-Fi」

の電波網が張り巡らされているために携帯パソコンがあれば、大会ホームページを受信しながら、様々な情報を手に入れる事が出来るなど過去に参加して来た学会とは大きな隔たりがあった。今後は日本での学会でも、電子機器の導入などにおいては同様な運営方法が徐々に取られていくと事になるだろうと思う。発表においては、本年は直ぐにガイドラインを変更する事が出来るような大きな発表は少なかったように思うが、それでも様々な分野の多くの先進的な発表が行われていた。中でも分子標的薬に関する発表が目白押しで、今後もさらに新たなターゲットが次々に研究・開発されていく事になると強く感じ、これらの新規分子標的薬に関してのさまざまな遺伝子やその変異に関する学習や情報がますます大切であると感じた。

　その後は「University of Michigan Hospital and Health Centers」での研修であった。講義研修として、「研修の概要」、「病院の概要」、「Cancer Centerの概要」、「骨髄移植」、「薬剤師による抗がん剤の貧血管理」、「Clinical Pharmacistの業務」や「治験業務」などの説明が行われ、また「外来化学療法室」や「入院患者に対する薬局」などの各施設の見学、そして研修生が各自に分かれて各日に半日ずつClinical Pharmacistに同伴しながら、彼らの実際の日常業務を身近で学ばせて頂いた。そこでは先ず、医師、レジデント、医学生、Physician Assistant (PA)、Nurse Practitioner (NP)及び薬剤師などで行うカンファレンスに参加し、その後は回診に同行した。そこではPAが病状を説明し、それに対する医師による指示が中心に行われていた。薬剤師の役割としては、薬剤の選択、腎機

能や肝機能低下時などの用量調節に対する意見を行う事、医師への薬剤選択に対するアドバイスなどであった。また薬剤師が患者自身への説明を直接行う事は少なく、代わりに患者への説明を主に行うNPやPAに対する指導が主であるとの事であった。また Clinical Pharmacist自身が直接患者には指導を行わないために、日本のように服薬指導録はほとんど書かないという事であった。概して日本では記録に追われる事となっているように感じるが、その点ではかなり合理化されていると感じた。また米国ではテクニシャンが調剤や抗がん剤の調製を行っており、本来薬剤師は職能を発揮する事が出来る業務に特化する事が出来ていた。それらの時間的な余裕が、薬剤師だけが持っている能力を他職種に示すことに充てられ、そのような中で薬剤師の存在意義を高めていると感じた。また米国のClinical Pharmacistが行う仕事は、日本より個々の薬剤師自身の実力が試される環境にあると思った。それらの仕事に対する責任感が本人の努力を生み、ますます実践力が伴う薬剤師を生んでいるのだろう。この点で日本の薬剤師は責任が少ない分だけ、業務に対する甘えがあるように感じた。また全般的に米国では、病院で働くそれぞれの職種に対する分業意識とそれに伴う各職種の責任の重さを強く感じた。つまりは、医師の業務を減らすために、薬剤師を含め多くの職種が日本では医師が行っている多く業務を、それぞれが責任感を持って分担して行っていた。当病院は米国でも最優良な大学病院のひとつであり、このシステムが全米の病院全てに当てはまるわけではないだろう。しかし日本に比べて、充実した人的な配置、高度に機械化された調剤システム、細分化された薬剤師職能およびそれぞれが持つ責任など驚愕する点が多数あった。中でも臨床薬剤師の資質や知識は日本より高いと思われた。しかし個々の業務自体には

大きな違いは無く、日本でもこれらを参考にしながら、独自のシステム構築が可能だと思われた。

本研修の機会を与えて頂いた日本医療薬学会会頭 安原眞人先生をはじめ関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。今回の病院研修では、団長の谷川原祐介先生が我々の希望を聞いて頂きながら、先方のJim Stevenson先生と何度も調整し、非常に充実した研修プログラムを作成して頂き、非常に有意義なものとなりました。また先生には同行中もさまざまなご指導を頂き、厚く御礼申し上げます。さらに研修をご一緒させて頂き、道中にて多くの事を学ばせて頂きました吉村知哲先生、原田知彦先生、土下喜正先生に厚く御礼申し上げます。また「University of Michigan Hospital and Health Centers」の多くの先生方にも、懇切丁寧な指導を行って頂き、非常に感謝致します。最後に、今回の海外研修にご理解を頂きました当院薬剤部の諸先生方に感謝致します。